平和をたずねて

広岩 近広

京都空襲 古都が震えた日⑤

政治判断で原爆落とさず

古都を震わせた京都市の空襲を取材するうちに、なぜだろうと自問することが一度ならずあった。被害の最も大きかった西陣、最初に空襲を受けた東山ともB29は単機で飛来している。空襲といえば東京や大阪に見られるように、大編成のB29によると思っていた。

なぜ京都は単機だったのか。私は投下弾にヒントを求めた。

西陣空襲は巨大な爆弾が7発(うち2発は不発)使われ、落下地点には大きな穴があいた。大型弾は人間を吹き飛ばして空に舞わせるほど猛烈な爆風を巻き起こした。しかし、東山空襲は異なる。松原署(現東山署)の沿革録には〈二百五十ポンド級焼夷弾一個、百ポンド級瞬発性爆弾五十個以上、二十ポンド瞬発性爆弾二百個を投下〉とある。

瞬発性爆弾の正体はわからないが、多数の子弾が搭載されたクラスター弾を想像させる。すさまじい勢いで人間や建物にドリルのようにくいこんでいる。弾丸が足から頭頂部に走り抜けた犠牲者も見られた。

投下弾の差異と単機のB29という共通項から、私は種類の異なる爆弾を使って破壊効果を確かめようとしたのではないかと推量した。あくまで私見だが、そうとしか考えられないのは、原爆投下のケースが脳裏にあるからだ。

日本の敗戦が決まったも同然のなかで、米軍は広島に続いて長崎に原爆を落とした。最たる狙いはウランとプルトニウムから別々に製造された2種類の原爆の破壊効果を比較するためだろう。

原爆といえば京都と広島が「AA目標」(最有力候補地)だった。『資料 マンハッタン計画』(大月書店、岡田良之助訳)は目標検討委員会の内容を記している。〈京都――この目標は、人口一〇〇万を有する都市工業地域である。それは、日本のかつての首都であり、他の地域が破壊されていくにつれて、現在では、多くの人びとや産業がそこへ移転しつつある〉

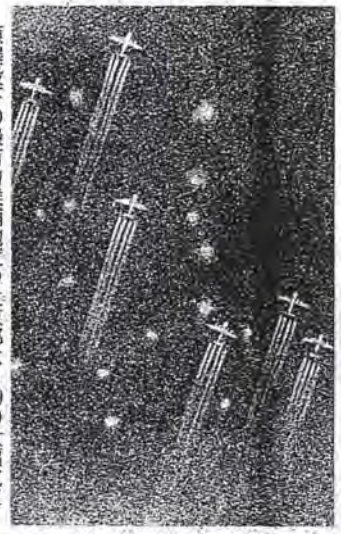
原爆の威力を知るうえで、大規模爆撃を受けていない都市を米軍は必要とした。京都空襲が東京や大阪に比べて小規模だったのは、原爆投下のAA目標だったからにほかならない。では、京都はなぜ、原爆投下から免れたのか。文化遺産があったからだろうか。

京都府立大文学部歴史学科の小林啓治准教授はこう解説する。「戦後の対日政策で米軍は当初、直接軍政を敷く予定でした。しかし欧州でうまくいかなかったので、日本では旧来の国家機構を生かしつつ米国が間接統治できないか検討をはじめた。間接統治を成功させるためには日本が米国に同調しないといけません。それを妨げる要因の一つが、日本人の宗教的な心の故郷である京都を全滅させることだと判断したのです」

京都に原爆を投下しなかったのは文化財を守るためではなく、冷徹な政治判断がなされたからだった。京都空襲と原爆の因果を思うにつけ、被害の大小ではなく、そこには学ぶべき歴史がある。

(この項おわり)

次回は1月19日に掲載



原爆投下の最有力候補地だった京都はB29の大編成に襲われなかった。写真は名古屋上空を襲ったB29の編隊―1944年12月撮影